

P.フットと R.M.ヘア : 判断を道徳的にするものをめぐって

佐藤岳詩

第二のテーゼは、責務や義務——すなわち、道徳的責務や義務のことだ——、道徳的に正しいこと、不正なこと、道徳的な意味での「べし」、こういった概念は、心理的に可能であれば、捨ててしまうべきである、というものだ。というのも、それはもはや残存していない倫理学の古い考え方の残余、あるいはその派生物であり、その考え方抜きではただ有害なだけであるからだ。(G. E. Anscombe [1958] p. 26)

1. はじめに

本稿の目的は、フィリップ・フット(1920・2010)とリチャード・M・ヘア(1919・2002)という二人の哲学者の立場を、特に「何が判断を道徳的にするのか」「道徳的判断を他の判断から区別するものは何か」という観点から整理し、両者の立場の異同と対立を明確にすることである。フットとヘアは、20世紀を代表するイギリスの道徳哲学者であるが、それぞれメタ倫理学レベルでは記述主義と指令主義、規範倫理学レベルでは徳倫理学と功利主義を代表する論者であり、ともにオックスフォード大学に所属しながら、互いに対する厳しい批判を繰り返してきたことで知られる。

しかしながら、これまでのところ両者を直接並べて対比する研究はあまり多くなく、特にそれぞれの道徳に対する理解についてのどのような差異が、最終的な二人の立場の違いを導いているかは明確には論じられてこなかった。そこで、本稿では、特に「何が判断を道徳的にするのか」に注目しながら、二人の議論を検討してみたい。というのも、そこに現れる「道徳とは何か」という理解の違いを見ていくことで、二人の考える「道徳哲学の目的とは何か」「道徳哲学とはどんな問いに答えることを目指すものか」についてのもっとも根本的な理解の違いが明らかになると考えられるからである。

本稿第二節ではまずフットとヘアの1950年代から1960年代にかけての議論を概観する。ここでは、真剣さや人間的卓越性、人間にとって良いこと、などがキーワードとなるが、注目すべき点の一つは、この二十年を通して、両者の主張は入れ替わっていくように見えるということである。続いて第三節では、彼女らの同僚や教え子であったジェフリー・J・ワーノック(1923・1995)、バーナード・ウィリアムズ(1929・2003)、メアリー・ミッジリー(1919・2018)らによる、両者の主張についての見解に触れる。そして第四節では1980年代以降、最終的にフットとヘアが到達した立場についてみていく。

なお、ここでの「道徳的」は「道徳的に肯定的な評価に値する」ではなく、「道徳の観点から何かを示す」を意味するものとして用いる。したがって、「道徳的判断」は「道徳的に

善い判断」「道徳的に優れた判断」を意味するわけではなく、「道徳の観点から何らかのことを示す判断」を意味する。たとえば「決して嘘をついてはならない」「場合によっては嘘をついてもよい」は、道徳的な観点から見て、特定の行為の禁止・許可を示すものであるという意味で、どちらも道徳的判断である。

また、以下のフットとヘアの応酬においては、道徳的なものかどうか問われるのは判断 (judgment) のみにとどまらず、考慮(consideration)、原則(principle)、理由(reason)、事例(case)などが、それぞれ問題となる。それらは本来ならばそれぞれに異なる分析を必要とするものであるが、それらを「道徳的にするもの」の探求に重点を置くという本稿の目的からして、特に必要がある場合は除いて、それぞれについての踏み込んだ考察は行わない。とはいえ、道徳的判断は一般的な道徳的原則に基づくか、というのは重要な論点の一つであり、その点は 2.3 節で取り上げる。

2. フットとヘア : 1950 年代～1960 年代

本節では、1950 年代、それぞれに第二次世界大戦の戦火を生き抜いたフットとヘアがオックスフォードに戻り、倫理学者としてのキャリアを積んでいった時期の論考についてみていく。その際に注目するのは、「何が判断を道徳的にするのか」という点である。

20 世紀に主流をなしたメタ倫理学の多くは、「よい」(good)、「悪い」(bad)、「べし」(ought, should)、「正」(right)、「不正」(wrong) などの語の分析を通じて、道徳的判断の本性を検討するものであった。しかし、自己利益の最大化を目指す慎慮 (prudence) の判断や美的判断、趣味判断、エチケットの判断、経済的判断などを考えれば明らかにように、そうした語は、必ずしも道徳的判断においてのみ用いられるわけではないように見える。「もっと運動をした方がよい」「服装のセンスが悪い」「今、その株を買うべきではない」など、私たちは一見して道徳的判断には見えないような判断においても、よい、悪い、などの語を使うことがある。では、道徳的判断とそれ以外の判断を区別するものは何なのだろうか。終始問題となるのは、推奨、真剣さ、優先性などによる形式的な規定と、人間的な卓越性や人間にとっての良さという内容による規定のどちらに重きを置くかである。

2.1 フット ① : 真剣さと優先性

最初に参照したいのは、フットが 1952 年に発表した“The Philosopher’s Defence of Morality”の中の一節である。この論文で彼女は、主観主義や心理学による道徳の消去主義に抗して、道徳の擁護を試みるのだが、その中で彼女は簡単に次のように述べている。

現在の道徳という語の用法を理解し、そしてそれゆえに、別の民族が道徳的判断をなしているかどうかを決定する際に何を探すべきかを大雑把に知っているだろう人ならば誰しも、何が言われねばならないかを知っている。たとえば、「価値づける」

と呼ばれる状況一般（このこともまた説明されうるが）において、道德語は、直接に間接に、行為者の能力のうちで適用されるべきであると求められる。行為者は真剣（serious）であり、道德的考慮は特定の優先権（precedence）を持つべきであると求められる。明確な線がひけないケースも当然ありえるし、あらゆる興味深い問いはそこから発生する。たとえば、後悔は道德概念のどこに位置づけられるべきか。ある人が行為へと一切動かされず、その事実は一切悩まされないなら、そしてそれが偶然ではなく継続的にみられるなら、私たちは「私はすべきだ」というのはその人が使った語の正しい翻訳だったのかを疑問に思うだろう。

重要なことは、その内容が私たち自身のものとはどれだけ異なっている、これは道德的判断であると認識しようという明白な印があるということである。このことは、私たち自身のものとは正反対の道德的判断を為す人を現に私たちは理解できるという事実によって理解しうる。（Foot [1952] p. 314）¹

この一節は、G. E. ムーアの述べたような独特な道德性質（moral property）の存在を、主観主義的な立場が否定しているという説明の一部分である。ただし、フット自身は論考全体を通じて主観主義にも客観主義にも与していないため、その意味では、この部分は厳密にはフット自身の主張を述べたものとは言いきれない。とはいえ、まずは本稿での以降の議論の出発点として、これをフットの主張と仮定して話を進めてみよう²。

ここで彼女は、ある判断を道德的判断とみなすために重要なことは、それが含む内容ではなく、そこで下される判断が行為者の能力のうちにあり、真剣さと優先権をともなっていることである、とする。すなわち、そこで指示される中身が何であれ、自分の力の範囲内で何かに優先権を与える仕方では真剣に下される判断を、私たちは道德的判断とみなす、ということだ。道德的判断はそれが含む内容によって他の判断から区別されるわけではなく、もっぱらどのような態度で下された判断であるかによって、他の判断から区別されることになる。

2.2 ヘア ① : 人の在り方の勧め

ヘアは上述のフットの論文と同じ年に出版された『道德の言語』（1952）において、名前は出さないもののフットが述べたような重要性、優先性によって道德的判断や道德を規定する立場を批判している。彼は「『道德的善』はなんらかの形でより威厳があり、より重要であり、それゆえ、それ自体の独自の論理を持つに値していると感じられている」（Hare [1952] p. 140/187）³ものであり、こうした主張は多くの見解に暗に含まれていると述べた個所で、その理由の一つを次のように説明する。

私たちが人間であるから、人間のよさについて感銘を受ける。……私たちは同じよ

うな状況の中に置かれるかもしれないから、その問題について深く感じ取るのである。……わたしたちは建築家であることや、精密時計を作ったり使ったりすることを避けられるようには、人間であることを避けるわけにはいかない。こうしたわけであるから、私たちがぐだす道徳的判断に従うことの（しばしば苦痛な）帰結は避けられない。

(ibid. pp. 141・142/187・188)

私たちは自分自身にかかわる問題を放っておくことができない。それゆえに人間の善さにかかわる道徳を放っておくこともできず、道徳を真剣なものとする。しかし、これに続けてヘアは次のように述べる。

道徳について合意しない場合「それは全く好みの問題だ。違ったままにしておこう」というのは、大変難しく、私たち自身の生活への影響が大きい場合には不可能である。……しかしながら、たいていの道徳的選択はこういうものであるけれども、この種の状況は道徳に固有のものではないことも指摘しておかねばならない。……台所を共有する家族はその使い方について違いを認めるよう同意することはできない。
(ibid. p. 142/188)

ヘアに言わせれば、重要な判断は道徳的判断だけではない。他にも重要な判断はいくらでもある。したがって、彼は道徳が重要で深刻なものとみなされていることは認めるものの、重要性が道徳的判断とそれ以外の判断を分ける印であるとは考えない。では、代わりにヘアは、何をその印と考えるのか。彼は次のように述べる。

私の説明では「陸軍ではなんであれ志願することは決してよいことではない」というような慎慮的判断(prudential judgment)を、「自分の約束を破るのはよくない」のような厳密に道徳的な判断から区別する手段にはならない、という反論がなされるかもしれない。しかし、先に行った考察[勸めは理由や判定規準を伴うという考察]によれば、私たちはこうした二種類の判断を満足のいく形で区別することができる。文脈(context)からして、第二の場合には前者と異なる比較の種類の中で勸めており、異なる効能群(virtues)を必要としているのは明らかである。……この文脈中の「人」という比較のクラスは「そのようになろうとしている人」というクラスである。(ibid. p. 144/190)

私たちが道徳的な勸めを行うために「よい」という語を用いるとき、私たちはつねに直接、間接に人々を勸めている。私たちが「よい行為」という表現やそれに似た

他の表現を使う場合でさえも、間接的に人間の性格に言及している。(ibid. p. 144/191)

ヘアは、道徳的判断を含む価値判断は一般に指令的要素と記述的要素の両方を含むと述べる。すなわち行為選択への助言と、対象の性質の記述という要素である。たとえば、「このホテルはよい」という価値判断は、他に特別な理由がない限り、そのホテルを選ぶよう助言し、またそのホテルは選ぶための判定規準を満たすような性質を有していることを示している。そしてこの指令的要素と記述的要素を有したうえでさらに、その指令的要素が「私はどんな種類の人になろうとすべきか」(ibid. p. 186/246)という選択を指導するものである場合、つまり、その背景に実質的な「人の在り方についての勧め」を含む場合、その判断は道徳的判断となる。他方、「陸軍ではなんであれ志願することは決してよいことではない」という(やや皮肉をともなった)慎慮の判断、保身のための判断は、文脈からして、そうしたあるべき人間像を背景にもたないため、たとえ行為への助言を含むものであったとしても、道徳的判断ではない。

そのため、この時点でのヘアは、優先性や真剣さといった形式的な点で道徳的判断を規定する考え方を批判し、「人の在り方」への言及という内容と「勧めるもの」という形式の両面によって、道徳的判断を規定していたと考えることができる。

2.3 フット ② : 人間にとって良いこと、害あること

フットは 1954 年、“When Is a Principle A Moral Principle”という論考を発表する。この論文はシンポジウムの記録ではあるが、ヘアの『道徳の言語』での議論を直接的に批判する内容になっている。同論文で彼女は、2.1 節で述べたような、内容のいかに問わず、真剣さや優先性で道徳的判断を理解するという従前の発言を離れ、ある原則を道徳的原則として理解するためには、背景に内容にかかわる特定の文脈がなければならないと述べる。

フットはまず、道徳的判断は行為の普遍的規則であるような原則から成るとするヘアの議論を攻撃する。彼女の考えでは、道徳的判断は常に普遍的原則の参照を必要とするわけではない。私たちはそうしたものなしに、個別の道徳的判断を下すことができる。

そのうえで、彼女は「決して歩道の白線を踏み越えるべきではない、広場の内側を歩くことは重要だ」や「明るい色の服を着ることは正しくない」という判断の事例を挙げる。たとえこの判断をする人が「この自分の原則に誠実に従い、他の人々にも同じようにさせようと試み、もし失敗したなら自分は責められるべきだと考え、心臓に負担をかけないとか、着飾るといった目的を諦めてでも、この規則を逃れることを認めることを拒否する」(Foot [1954] pp. 104-105)としても、なお次のように言えるとしている。

このことは、これらの原則を道徳的原則とするには十分ではない。それらの原則は

何かの役割を担うにはとても奇妙であり、それ以上に、孤立しすぎている。(ibid. p. 105)

重要なのは、孤立 (isolation) という個所である。たとえば「明るい色の服を着ることは正しくない」という判断は、判断者がクエーカー教徒であるとか、明るい服に虚飾 (ostentation) を感じ取る人であるという背景を与えられれば、道徳的判断であるように見えはじめるだろう (ibid.)。そこから彼女は次のように続ける。

したがって、特定の背景、道徳的原則が明確に認識できるような特定の背景が書き込まれない限り、「これは道徳的原則ではありえない」と言ってもかまわないという事実、ここを出発点としよう。そうすると、どんな種類の背景が書き込まれなければならないのかと知りたくなる。……それは、私たちがみな道徳と呼ぶことに同意するような、より一般的な原則が喚起されるということだろうか。それは間違いである。そもそも、そこに含まれるのは規則ではなく、記述 (description) だからである。(ibid.)

フットに言わせれば、明るい色の服を着ることを虚飾とみなすこと (see as ostentatious) は「明るい色の服を着るべきではない」という判断を道徳的判断にするが、それは明るい服を着ることを虚飾という記述のもとに置くことであって、その背後に「虚飾を避けよ」という指令的な原則を見出すことではない。「道徳的原則を有する時には、誰もが道徳とみなす基本的原則から派生する何かを有しているというのは正しくない」(ibid. p. 106) のである。言い換えれば、それは指令的な普遍的道徳原則から演繹されて何かを指令する判断であるから道徳的判断なのではなく、ある行為を虚飾という特別な仕方記述するような判断であるから道徳的判断なのである。

道徳的判断が指令的であるという理解を否定し、代わりにフットは、道徳的判断は記述的なものであると強調する。特定の種類の背景に基づいて何かを記述したり、背景それ自体を記述したりするのが、道徳的判断なのであって、それは誰かに何かをせよと命じたり、何かを勧めたりするものではないのである。「私は、道徳的原則は特定の種類の背景を持つのでなければならないと論じてきた。もし私が正しければ、道徳的原則を命令と比較することは、根本的に間違った方向を向いている」(ibid. p. 110)。したがって、フットに言わせれば、まず、道徳的判断や原則の形式は、「何かを指令、助言するもの」ではなく、「何かを記述するもの」なのである。

しかし、記述的とは言え、いつでもなんでも好きなように記述してよいわけではない。たとえば「善い」(good) であっても、道徳的な意味でそれを使う場合には、その使用は判断者によって恣意的に意味を与えられてはならず、「道徳的判断を表現しようとするなら、

その発言は特定の仕方では理解可能 (understandable) なものでなくてはならない」(ibid. p. 107)。これは (ヘアは否定するだろうが) ヘアを含む主観主義的立場全般に対する批判となっている。主観主義者たちは、対象の特徴に言及せずに、判断者の主観的な好みや態度に基づいて、道徳語はもっぱら形式的に使用可能だと主張する。そして、2.1 節で述べたように、かつてのフットはそれを肯定的に捉えていた。しかし、この論文以降では、フットはそのような形式のみによる道徳的判断の理解を否定し、道徳語の適用の可否は、その判断の実質的な内容についての、世界の側の、ないしは、間主観的な理解可能性によって定まっていると強調する。

では、そのような理解可能性をもたらすような「特定の文脈・背景」を、フットはいつたいどのようなものと考えているのか。それは、当の論文では必ずしも明らかではないが、たとえば彼女は次のように述べている。

正、不正についての誰かの見解を把握しようというときに、「正直」「誠実」「故殺」「窃盗」「虚飾」「裏切り」といった語が重要な役割を担っている、ということは指摘する価値があり、それらなしでどこまでやれるかを問うてみるのは面白いだろう。この種の概念は、「善い」や「悪い」を別の種類の個別事例への新しい適用へと接続することを可能にする。たとえば、明るい色の服を着ることはうぬぼれと同じ仕方では悪い、というように。この種の表現は、何かを見るときの特異な仕方をともなっている (ibid. p. 108)

フットによれば、重要なのは規則ではなく、「それを見る仕方」にかかわる背景であり、それなしには、私たちはある原則を道徳的原則と理解することができない。その際、「正直」「誠実」「裏切り」などの語はそうした語を使う人が、対象をどのように見ているかを示してくれるのであり、そうした語に注目することが「善い」「悪い」「正」「不正」「べき」などを含む判断が、道徳的なものかそうでないかを理解するための手助けになる⁴。しかし、同時に、「それを見る仕方」についての語りが意味をなすためには、「裏切り」「狡猾」「残酷」について私たちが語るのと同じように、判断者が物事を記述し、応答を表現してくれることが必要なのである (ibid. p. 109)。

こうした特別な種類の背景がより明確に語られるのは、上述の論考から 4 年後に刊行された 1958 年の“Moral Beliefs”である。そこでフットが示そうとしていることは、何が道徳的判断であるかは判断の対象に依存するのであり、決して、判断者の態度のみに依存するわけではない、ということである⁵。このことを示すために、フットはまず、道徳以外の事例から始める。たとえば、「誇りに思う」ということは、普通、空や海には適用されない。「空を誇りに思う」という発言を理解可能にするためには、何らかの極めて特殊な背景が

必要である（彼は自分が空を支えていると思い込んでいる、など）。

フットの考えでは、「評価する」「善いと考える」「勧める」などの道徳的判断も同じである。その事例として、フットは、「一時間ごとに三度、拍手をすること」をあげる。ヘアのように「勧め」によって道徳を規定するならば、そうした「一時間ごとに三度、拍手をすること」を善い人のなすこととして勧めるような、道徳的に異常な人物の存在を認めざるを得ない（Foot [1958] p. 112）。しかし、「ある人、あるいは、ある行為の良さないし悪さを支持（count in favour of）しうるのはいったい何であるのか」（ibid. p. 118）という観点から見ると、それは何らかの背景（それがひどく勇気が必要とする行為であるとか）を与えられない限り、意味が通らないものである。それゆえに、この判断は道徳とは無関係の判断と捉えるべきである。

〔一時間ごとに三度、拍手をすることを道徳の事例と見なすことの〕困難は明らかに、特別な背景なしには「どういうこと？」（What's the point?）という問いに答えることができないという事実とつながっている。……道徳的な徳（virtues）が人間にとって良いことと害あること（human good and harm）とつながっていることは明らかであり、どんなものでも好き勝手に良いこととか害あることと呼べる、などということは決してありえない。（ibid. p. 120）

ここでフットは、この間にヘアにも帰された非認知主義的な考え方を批判すると同時に、自分自身の立場を以前よりも明確に示している。つまり、先にも述べたように（もっとも粗野なバージョンでの）主観主義的な非認知主義は、道徳的判断を対象の認知に基づくものと捉えないため、道徳的判断に客観的な根拠を認めず、あくまで道徳的判断は各人の主観的な好みに基づくものでしかない、と主張する立場と解しうる。道徳を好みに基礎づけるそのような立場を退け、彼女は「人間にとって良いことと害あること」という背景の文脈が、ある事例や性格特性を道徳的なものにするのだと考える⁶。「まずは評価の適切な対象に手をかけるのでなければ、命令を受け入れるとか、決心するとかのように、何か評価とはまったく違うものを、私たちの網は捉えてしまうだろう——あるいは何も捉えられないか」（ibid. p. 113）。

このことに道徳的判断は勧めや指令ではなく、記述であるという従来の立場を組み合わせると、この時点でのフットにとっての道徳的判断とは、内容面においては「人間にとって良いことと害あること」とかわかり、形式面においては「それらを記述する」判断ということになる⁷。これは、真剣さや優先性という形式をともなった判断であれば、内容を問わず道徳的判断と理解できるという、2.1 節で述べたような立場とはまったく異なるものであり、また、助言や勧めという形式面を強調するヘアに対する批判をともなうものにもなっている。

2.4 ヘア ② : 優越性

前項ではフットの立場の展開を見た。ではヘアの方はどうだろうか。『道徳の言語』の時点でのヘアは、道徳的判断を指令的要素と記述的要素を持ち、あるべき人間を勧めるという文脈をもつものとしていた。しかし、1963 年の『自由と理性』で、彼は次のように述べている。

「道徳的」の語には一つの意味（たぶんもっとも重要な意味）があるが、その意味によれば、道徳的原則はこのように他の原則には優越されえず (cannot be overridden)、何らかの例外を認めるための変更や制限しか許さないという性質を持っている。……ある人の道徳的原則は、この意味では、たとえその原則が美的な原則やエチケットの原則のような従属的な原則の破棄を含んでいるとしても、自分の生(life)を導くために最終的に受け入れるような原則である。(Hare [1963] pp. 168-169/238-239)

ここでヘアが示したのはいわゆる「優越性」(overridingness) 規準であり、ある原則が道徳的原則であるかどうかは、各人がその原則に向ける態度によって決定されるという規準である。たとえば、インテリアの配置のような一見して美的な原則に分類されるようなものであっても、ある人が自分の生活を導くようなものとして、ほかの原則に優越するものとして扱っているならば、その原則はその人にとっての道徳的原則である。したがって、フットの批判に対して、ヘアは「白線を踏み越えるべきではない」であれ、「一時間に三度、拍手をすること」であれ、その人が本気でそれによって自分の生を導いているのなら、それはもはやその人の道徳的原則である、と応答したことになる。

では、「人間の在り方の勧め」の方はどうなったのか。『自由と理性』でヘアは、私たちが行為を推奨したり、非難したりする理由には二つの異なるものがあるとし、「一方の理由はほかの人々の利益に関係し、他方の理由は人間的卓越性 (human excellence) の理想に関係しているのである」(ibid. p. 211) と述べる（少し後で、前者は「功利主義的理由」と言い換えられる）。そして、それぞれに対応する形で、道徳の議論は二つに区別される。すなわち、関係者の利益にかかわる功利主義の議論（黄金律型の議論）と、人間的卓越性の理想にかかわる議論である。両者はいずれも道徳的判断の重要な領域を占めるものであるが、それぞれに異なるものであり、一方の議論を用いて他方の議論を解決することはできない。しかし、いずれの理由、議論においても通底しているのは、道徳にかかわるものとして、そこには指令的要素、記述的要素、優越性があるということである。

したがって、この『自由と理性』の段階では、ヘアは背景としての文脈を人間的卓越性だけでなく、当事者たちの利益を含むものへと拡張すると同時に、単に勧めるのではなく、

自分の生を導くもの、優越的なものとして採用しているという制限をかけることによって、道徳的判断の領域を限定した。2.2 節で述べた『道徳の言語』での説明と対比して考えるならば、道徳的判断は「人の在り方」という内容にかかわり、「勧める」という形式を持つ、という立場から、優越性というやや強い概念を用いて形式面での道徳の範囲を制限する一方で、「人間的卓越性の理想」に加えて「当事者らの利益」にかかわる判断を道徳的判断に含めるという改定で内容面においてはその範囲を広げたとみることができる。

3. インターミッション : ヘアとフットの評価

本節ではいったんヘアとフット自身の言葉を離れて、彼らの周囲の人物によるヘアとフットについての言説を見てみたい。まず、二人の同僚であった分析哲学者のジェフリー・J・ワーノックは *Contemporary Moral Philosophy* (1967) において、次のように述べている。

ある人の道徳的原則や規準は、当人の生活の中での振る舞いにおいて支配的であるようなものと同一視できる、少なくとも、ヘアの指令主義はこうした見解を含んでいる。……この見解では、私たちはこのことが何らかの原則を有するすべての人に必然的にあてはまると言うよう義務づけられることになる。しかし、これは明らかに誤りだろう。(Warnock [1967] p. 54)

多くの人にとって、特定の原則が私たちの振る舞いにおいて主要な役割を果たすのは、……それらが道徳的原則だと信じられているからだ。それらが優越的で一般的に適用されるものとして扱われることに、それらが道徳的原則であることが存しているというのは逆転している。(ibid. p. 57)

ワーノックに言わせれば、優越性による道徳的原則の理解は完全に誤っている。道徳を重要視していない人、優越的に扱っていない人はいくらでもいるからである。実際のところ、仮に道徳が重要だとしても、それは重要だから道徳なのではなく、特定の内容を持つ道徳だから重要なのだ、とワーノックは考える。

結局、私たちは、道徳はその主題によって何とかして特徴付けられるべきだという考えに戻ってきてよいだろう。つまり、ある見解を道徳的見解にするのは、その内容であり、それが扱っているものであり、それが基礎づけられるような考慮のタイプの範囲である。(ibid. p. 54)

自分が道徳的判断をなしていると言う人は、少なくとも、問題になっているのは人

間にとって良いことか害であること、福利 (well-being) その他のことであると言えるのでなければならない、ということは極めて説得的であるように見える。(ibid. p. 57)

したがって、ワーノックによれば、ある見解が道徳的見解かどうかは、それが扱っている内容によって決まる。特に、人間にとって良いこと、害であること、福利などを扱っている判断こそが、道徳的判断であり、その意味でフットの立場に賛同を示している。

ヘアの教え子の一人である、バーナード・ウィリアムズも *Morality: an Introduction to Ethics* (1972) において、同様の立場に立つ。

私はワーノック氏が到達した結論を正しいものとみなす。つまり、道徳の何らかの重要な境界を決定するものは、何であれ「道徳」と記述されるような判断、ポリシー、原則の内容への言及を含まなければならない。おそらく道徳哲学など知らない人からすれば、そうでないと思う人がいるということすら、驚きであるだろう。(Williams [1972] pp. 73-74)

私がここで論じたいことは、.....道徳的な立場の印として、人間の福利に言及していること、という部分的な規準がもつ利点についてである。この提案は P.R. フット氏やその他の論者によって発展させられ、またワーノック氏もよく理解していたものである。(ibid. p. 74)

このように両者は、優越性や重要性などによって道徳性を理解しようとする立場に批判的な態度をとる。特に、ウィリアムズはのちに、そうした道徳の中でも「義務」に強い重要性を見出す「道徳」を特異なシステムとして厳しく批判する⁸。

他方、ヘアやフットらと同僚だったオックスフォードの哲学者であるメアリー・ミッジリーは、彼らとは逆に、重要性や真剣さによる道徳の理解を擁護する。“Is 'Moral' a Dirty Word?” (1972) という論考で、彼女は次のように述べる。

道徳語の中心的な役割は、もしそれが使い続ける価値をもつとすれば、フィリップ・フットが提示したように、ある種の深刻さと重要性を示すことにあり、その他の含みは形式であれ内容であれ、それらから生じるという仮説を私は示したい。ちょうど、「これは好き勝手にはできないぞ、道徳の問題が含まれている」という言葉に表れるように。(Midgley [1972] p. 123)

だから私は優越性についてワーノックとは違う立場をとる。私の考えでは、道徳性

が人間の幸福とつながりをもつとすれば、それは人間の幸福が極めて重要で深刻な問題だからだ。彼が内容について何らかの制約を探そうとしたこと自体は正しいと思うけれど。(ibid.)

深刻な問題とは何だろうか。深刻な問題とは、私たちに深く影響を与える事柄だ。……深刻なものは私たちの目的の体系の中心にある何かに影響を与える。……道德とは端的に最上級に深刻なことだ。(ibid. pp. 144・146)

このように、ミッジリーは重要だからこそ特定の内容が道德と結びついているのだと述べ、2.1 節で説明したような、最初期のフットの主張、すなわち真剣さや優先性による道德的判断の理解可能性を支持して、ワーノックに反対する立場をとる。道德的判断は特定の内容をもつから重要なのか、重要だから特定の内容をもつのか。いずれにしても、当時のオックスフォードにおいては、優越性・深刻さ・重要性といった概念でまとめられる形式による理解と、人間にとっての良いものと害あるもの・利益・福利といった概念でまとめられる内容による理解という、二つの道德の捉え方があったと言えるだろう。

4. その後のフットとヘア : 1980 ~

50~60 年代を通じて、フットとヘアはさまざまな議論を交わし、それぞれに立場を変化させてきた。では、その後、二人の最終的な主張はどのようなものとなったのだろうか。

4.1 ヘア ③ : 『道徳的に考えること』

まずはヘアの立場から見よう。彼の最終的な立場は 1981 年の『道徳的に考えること』に集約されていると言ってよい。そこでヘアは、道德的判断を指令性、普遍化可能性、優越性の三点から形式的に規定する。ただし、指令性と普遍化可能性は価値判断一般に共有される性質であるため、実際に道德的判断を他の判断と区別する仕方では道德的判断ならしめているのは優越性である。この点は、『自由と理性』のころから変わっていないと言えるだろう。特に、ワーノックの批判に対しては、以下のように応じている。

道德性の「網」は、道德的判断とみなしうるものに対して実質的な制限を加えようとする人々が提供するものよりは、はるかに大きい。しかし、普遍的で指令的な形式を持つ断定的判断を全く行わない人々を捉えるほどに大きいわけではないのである。ワーノック氏は、たとえばホメロスやアリストテレスとは道德的論争を行っていないことになると思えざるを得ない。なぜなら、彼らはワーノックの意味での道德的判断を行っていないからである。これと対照的に、わたしは、彼らともニーチェとも論争し、推論することさえできる——もし彼らが断定的な普遍的判断を提示す

る用意があるならば（もちろん、彼らにはその用意があるはずである）⁹。（Hare [1981] p. 187/279）

特定の実質的な内容によって道徳的判断とそうでないものを区別するならば、一般的に道徳的判断とみなされているものが、恣意的に、そうではないとみなされてしまう恐れがある。『自由と理性』においても、ヘアはナチ党員をあくまで無道徳主義者（アモラリスト）ではなく、誤った道徳的判断をする不合理な者たちとして、道徳の形式の枠内で断罪することを試みた。それは『道徳的に考えること』でも同様である。ヘアは内容のみによって道徳的判断とそうでない判断を区別することをあくまで否定することで、ぎりぎりまで理性による対話の余地を残そうとする。

そして、同書では、そうした形式面での議論の強調、発展の帰結として、選好功利主義と二層理論という道具立てが持ち込まれたことで、結果として 2.4 節で述べた『自由と理性』における人間的卓越性の理想と利益の区別は後景に退いている。ヘアは同書で、自分の選好に配慮することを合理的としたうえで、あらゆる選好を「わたし」の選好とみなし、内容を問わず強度によって比較することで、採用すべき原理を形式的に決定するというシステムを採用した（ibid. chap.5-6）。その際、『自由と理性』の段階では、功利主義的な議論によって扱うことができないとされていた卓越性の理想を含む問題もまた、行為指針の決定というレベルでは、その他の利益の問題と一括して扱われることになったのである。そのために、両者の区別は表立って議論されることはなくなった。

とはいえ、その形跡は直観レベルと批判レベルから成る二層理論の中にとどめられている。すなわち、日常的に使用する一見自明な原則は、私たちが直観的に正しいと信じて従うような原則であり、私たちは日常的にそうした原則に従って行動している。中でも道徳の原則は、優越的な原則であるため、他の原則と比して、より重要な位置にあって私たちの生活を導く原則である。それらは、ある意味で、人間的卓越性の理想としての道徳という側面を残している。そして、公正な利益の考慮は選好への配慮という形で、批判的なレベルに置かれているようにも見える。

さて、『道徳的に考えること』でのこうした試みはヘアの代名詞ともなり広く名を知られたものとなったが、同時に、選好功利主義は道徳的な問題について、その道徳的是非を問わずに、もっぱら整合性と目的合理性の点から問題の解決を試みるものでもあったため、フットやウィリアムズから厳しく批判されることになる。それは、どちらが道徳的に正しいのかという問いに対して、より強い選好を満たすことが合理的である、と答えるようなものだからである。とはいえ、逆に考えるなら、各人が道徳的に正しいと信じることそれ自体の是非になるべく踏み込まずに、理性の観点からお互いの立場に立って事態の收拾を図るというスタンスは、第二次世界大戦に従軍して各地を転戦し、最後は捕虜としての過酷な体験を経たヘアの一貫した態度でもあった。相手を邪悪、無道徳主義者と言って排除

するのは最後の手段であり、むしろ何とかして可能な限り、同じテーブルで理性に基づいて議論する方途を考えることこそ、道徳哲学の使命だと、彼は考えたのである。

4.2 フット ③ : 『人間にとって善とは何か』

フットは、晩年にかけてある種の転回を行い、初期の自分の考えを誤ったものであったと認めている¹⁰。しかし、人間にとっての善を重視し続けていたという点では“Moral Beliefs”以降も彼女の思想は一貫していた。晩年の著作『人間にとって善とは何か』(2001)において、フットは、「道徳的議論を根拠づけるものは、究極的には、人間の生のあり方についての事実(facts about human life)にある」(Foot [2001] p. 24/51)と述べる。人間にとっての善とは、人間の善き生を構成する要素であり、様々な徳はそうした善き生をもたらすために必要なものである。

男性であれ女性であれ人間は目的に対して勤勉で忍耐強くある必要があるが、それは家に住み、服を着て自分自身を養うためだけでなく、愛や友情にかかわる人間的な目的を追求するためである。人々は家族の繋がり、友情、隣人たちとの特別な関係を築く能力を必要とする。また行動規範を必要とする。忠誠心、公平さ、親切心、またある環境では従順さといった徳なしに、人々はこうしたことがらを手にすることができのだろうか。(ibid. pp. 44-45/89)

善き生は、人それぞれに多様なものである上、その人が生きている環境にも依存するものなので、一概に「しかじかのようなものだ」と言えるものではない。しかし、人間にあっても「自然誌的物語」(natural history story)といわれるものが存在するため(「人間は服を作り、家を建てる」「人間は行動規則を定め権利を承認する」など)、全体としての人間にとっての善さ(goodness)といえるものは、存在している。しかし、それを特定するためには「個人にとって善いものとは何か、人間はどのように生きているのかを考察しなければならない。言い換えれば、人間とはどんな種類の生き物なのかを考察しなければならないのである」(ibid. p. 51/100)。

『人間にとって善とは何か』の第一章から第三章は上のことを述べるためにあてられているが、それに続く、第四章から第六章で論じられているのは、道徳的判断と実践的合理性の関係である。特に、慎慮の判断と道徳的判断の関係について、フットは二つの批判を行う。第一に、慎慮の判断によって、善を基礎づける立場の批判であり、第二に、道徳を慎慮よりも優越させる立場の批判である。これが全体としてヘアへの批判をなしているのは明らかだろう。ヘアは自己の利益への配慮という合理性から出発しつつ、優越性によって道徳の領域を確保しようとしたからだ。

さて、前者においてフットが攻撃したのは、欲求や利益を基礎としたヒューム主義的な

ものとして慎慮全般を捉えたうえで、そのようなもののひとつとして道徳を理解する立場である。フットによれば、そもそも行為の合理性は必ずしも欲求や自己利益によってのみ説明される必要はない (ibid. pp.60-64/116-123)。むしろ、人間にとっての善は、個人のその場での欲求などとは独立に、それ自体として行為の合理性を説明しうる。その意味では、欲求や自己利益に基づく慎慮の判断は、判断の一形式でしかなく、少なくとも行為の合理性にとっての全体をなすような唯一の特別な地位を占めるものではない。

しかしながら、フットは道徳を人間にとっての善と同一視するわけではない。そのため、第二の批判として、道徳的判断を慎慮の判断よりも優越させる立場の批判を行う。彼女は同書の第五章において次のように述べている。

私が示したいのは、道徳哲学に特有の主題だと通常考えられている判断は、共通の概念構造を持つ行為評価というより広いクラスに属するものとして本来は理解されるべきものだ、ということである。……私自身の見解はこうである。道徳的判断を他の諸評価に属するものとして理解することは正しい——これらの評価はそれほど近接しているとするに値するほどの重要性はないように見えるかもしれないが。

(ibid. p. /129-130)

彼女は近代の多くの道徳哲学者が「自分たちの扱っている主題が、もっぱら個人間のあるいは個人と社会のあいだの関係と関連し、それゆえ責務や義務や慈善的行為といったことと関連すると考えている」(ibid. p.68/131)と指摘する。その上で、道徳という語がしばしば個人間の問題に適用されること自体には自分も反対しないが、それでも「自己のみにかかわる」行為やその理由についての判断と、道徳の判断の間には実質的な区別があるとする立場、両者を完全に分断する立場には異議を呈する。というのも、両者はいずれも「合理的な人間の意志の評価」という共通の特徴から論じることができるからである (ibid. p. 69/133)。たとえば、自己のみにかかわる判断も、「道徳」判断も、自発的な行為と目的 (voluntary action and purpose) を評価対象としており、そのために、両者はともに思慮 (wisdom) の徳とかかわっている。

同書でのフットの目的の一つは、さまざまな徳を人間にとっての善という観点から全体として扱うことである。そのため、自己のみにかかわる判断と、個人間の判断は明確に区別されるべきだという立場、特に、それらを区別したうえで、後者を優越させるべきだという立場を、フットは厳しく批判する。自己のみにかかわる判断と、個人間の判断の構造は同一なのであり、後者を原理的に優先させるような何かなどない。大事な約束は軽い風邪に優先するだろうが、重篤な病は簡単な約束を破るまっとうな理由になる。「道徳的な考慮要因は他の要因より優先される」というスローガンが表しているのは、道徳哲学上の真理などではなく、何が為されるべきかに関する説得力を欠いた教義でしかない」(ibid.

p.79/149)。

とはいえ、全体としてみたときには、両者を合わせた「人間にとっての善」を探究することが道徳哲学のなすべきことである、とフットは考えていた。さらに、実際には、「自己のみにしかかわる」徳であっても、道徳の問題と言ってしまうという気持ちも彼女の中にはあったように思われる。第五章の最終段落で、フットは次のように述べている。

自分にとって善いことを受け入れる心づもりがあることを意志の徳（意志にかんする卓越性）として認識すること、そして自分だけにかかわる面からの生のあり方に対して、希望や善いことを受け入れる心づもりといった徳がもつ大きな重要性を理解すること、これらも大事なことだと思う。そして、消極的な側面としては、他人の人生を台無しにすることはなくとも、自分自身の人生を台無しにしてしまうような、ある種の臆病さや習慣墨守、身勝手な自暴自棄などについて考えるときには、「道徳的欠陥」という記述を使いたくなる。(ibid. pp. 79/149-150)

彼女はこの個所の少し前で、「ひどい災難に見舞われた人が自殺したい気持ちに抗うことが希望と勇気という徳の行使でありうることは明らか」(ibid. p. 77/145)と記しており、こうした人たちについて論じることができないとすれば、その道徳哲学には何か欠けたところがあると述べている。実際、他人に関係する行為の理由だけが道徳の問題だと考える立場は、容易に「べし」(ought)には特別な何かがあるという主張に結びつく。つまり、個人的な利益と、全体の利益が対置された上で、後者に絶対的な優先権が与えられ、それが「(個人的な事情はどうあれ)～すべきだ」という義務をともなう仕方では指令的に提示される。そして、後者のみを道徳と呼ぶ。このような道徳の理解は、すでに見てきたように、フットには認めることができないものであった。

本節でのフットの立場を簡単にまとめておこう。以前のフットは「人間にとって良いことと、害あること」によって道徳的判断を他の判断と区別してきた。『人間にとって善とは何か』でフットはそれを「人間にとっての善」として、自然的な人間の生と結びつけることで、より明確化する一方、それを道徳的判断の印であると明示することを避け、ただ全体としての「人間にとっての善き生」を根拠づけるものとして提示する。人間の自発的行為を評価する実践的判断は道徳的判断であろうとそうでなかろうと、結局のところ、そうした善き生へとつながるものである限りにおいて、道徳哲学の主題となるのである。

4.3 フットとヘア

最後に、結局のところ、フットとヘアの最終的な立場はどのように異なり、またどのように重なっているのだろうか。

ヘアの出発点は、人間の在り方の勸めを行うものという、道徳的判断についての理解で

あった。勧めである以上、道徳的判断は指令的要素と記述的要素を備え、行為を指導するものとなる。あることをすべきではないと誠実に判断する者は、特別な事情がない限り、決してそのことをしない。他方、フットは道徳的判断を直接的には勧めと捉えないため、指令的要素や行為指導性を道徳的判断の特徴とは認めない。フットにとっては、道徳的判断は記述であり、特に人間にとっての良いことと害あることという内容をともなうものである。判断と個人の行動は独立であり、ある判断を下す人が何らかの行為の一般的原則を有しているとも限らない。

ヘアがあくまで「私はどのような人間になろうか」ということから議論を始めるのに対し、フットは「なにが人間にとって良いことか」ということから議論を始める。その意味ではヘアは人間を変化するものと捉えており、フットは人間を一定の本質をもった存在、ないしは一定の方向へと向かっていくべき存在とみなしているとも考え得る。ヘアの視点から言えば、行為を通じてどのような人間にでもなりうるからこそ、私たちは自分の行為の選択を真剣に考える。他方、フットの視点から言えば、人間は特定のものを良いもの、害あるものとして受け取る一定の存在であるからこそ、自他に与えられるものが良いものかどうかをじっくりと吟味しなければならない。ここからさらに、ヘアは個人としての人間に、フットは種としての人間に焦点を合わせているとみることもできるかもしれない。いずれにしても、この両者の道徳理解の違い、そこで登場する人間の捉え方の違いは、道徳的判断とは何かというメタ倫理学上の立場の違いから、私たちは何をなすべきかという規範倫理学上の立場の違いに至る、両者の対立を導き出している。

そのうえで、両者とも晩年には、個々の判断の道徳性について論じることを離れて、すべてを考慮したうえでの (all things considered) 判断へと力点をうつしている。ヘアは、人間にとっての利益を公正に配慮することという道徳的判断の在り方を発展させ、特定の内容をもった道徳的判断かどうかということにこだわらず、さまざまな判断の衝突を選好の強度という観点から合理的に解決することを提案する。フットもまた、人間にとっての良いことと害あることと結びついた道徳的判断の見方を展開して、人間の自発的行為全般についての判断を理論の中心に置き、それらを評価する根拠としての人間にとっての善ということを重視する。

このとき、フットから見れば、ヘアのような仕方で合理性を問う仕方はなお、人間にとっての善を問う実践的推論の一形式に過ぎない。道徳哲学はもっと私たちの生の全体、徳全般を含むような仕方で論じられねばならない。とはいえ、ヘアの方から見るならば、『道徳の言語』で述べられていたように、人間であることを免れ得ない人間としての私たちの選好は、現実には、私たち人間にとっての善を離れたものにはならないのであって、人間にとっての善などというものを殊更に強調する必要はない。その上で、たとえ、実践的推論に様々な形式のものがあるとしても、ヘアのような仕方で合理性を問うのでなければ、その実践的推論は、およそ実効性を欠いたものになる、と主張しうる¹¹。

いずれにしても、両者はともに、道徳的判断をある意味で特別なものとみなす立場を経て、最終的には、道徳であるかどうかにかかわらずに、さまざまな判断の合理性を問う立場に到達している。その意味では、道徳という語の放逐を命じたアンスコム箴言は、最終的に、受け容れられたのかもしれない¹²。

5. おわりに

フットもヘアも最終的には、道徳的判断と慎慮の判断との区別にこだわらず、可能な限り広い問題を取り扱うことを目指した。それは二人がともに、応用倫理学の問題に積極的に取り組み、現実社会の問題をまっとうに扱えないのなら、道徳哲学には意味はないという態度を共有していたことから発していたのかもしれない。

とはいえ、もちろん、両者はそうした問題に対処するための方法論においては、大きく袂を分かつている。ヘアは 1995 年の“Philippa Foot on Subjectivism”という論文で、人間にとっての必要という考え方からは、具体的な道徳的判断を引き出すことはできないという批判を行っている。この批判は徳倫理学にしばしば寄せられてきた、具体的な行為指針を打ち出すことができないという批判と重なっている。他方で、フットのヘアに対する批判は、無差別に選好を充足しさえすればよいとする功利主義全般への批判となっている。フットとヘアの議論の応酬を見ることで、私たちはメタ倫理学と規範倫理学の強い結びつきをあらためて理解することができるだろう。

最後に、二人の対立をさらに外側から眺めるならば、両者は道徳的判断と行為、そして理由に強くこだわっていたという点で、結局のところ同じ陣営にいても考えられる。その意味では両者の立場はそれほど遠くない。それはフットの親友でもあったマードックの言葉で言えば、二人ともが結局は「選択の倫理」とらわれている、ということでもある¹³。意志、行為、選択を重視する倫理学は近代以降の英米圏の倫理学において常に中心的な地位を占めてきた。しかしながら、ウィリアムズやマードックをはじめとした、それらに批判的な立場からの議論の検討も現代では盛んになってきている。今後はそうした立場との対比という作業を通じてこそ、生誕 100 年を迎えたフットとヘアという二人の哲学者の遺産はより深化させられるのかもしれない¹⁴。

参考文献

- Anscombe, G.E.M. [1958] “Modern Moral Philosophy”, in *Philosophy*, vol. 33(124), pp. 1-19.
- Foot, P. [1952] “The Philosopher’s Defence of Morality” *Philosophy* vol. 27(103), pp. 311-328
- Foot, P. [1954] “When Is a Principle A Moral Principle”, *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volumes* Vol. 28, pp. 95-134

- Foot, P. [1958] "Moral Beliefs" repr. *Virtues and Vices*, Oxford University Press, pp. 110-131
- Foot, P. [2001] *Natural Goodness*, Oxford University Press.
- (『人間にとって善とは何か：徳倫理学入門』 高橋久一郎監訳、筑摩書房、2014)
- Hare, R.M. [1952] *The Language of Morals*, Oxford University Press
- (『道徳の言語』 小泉仰・大久保正健訳 勁草書房 1982)
- Hare, R.M. [1963] *Freedom and Reason*, Oxford University Press
- (『自由と理性』 山内友三郎訳 理想社 1980)
- Hare, R.M. [1981] *Moral Thinking*, Oxford University Press
- (『道徳的に考えること』 内井惣七・山内友三郎監訳 勁草書房 1994)
- Hare, R.M. [1986] "Why Do Applied Ethics" repr. in his *Essays in Ethical Theory*, Oxford University Press 1989
- Hare, R.M. [1995] "Philippa Foot on Subjectivism" in *Objective Prescriptions: and other essays*, Oxford University Press, pp. 87-95
- Midgely, M. [1972] "Is 'Moral' A Dirty Word?" in *Heart and Mind*, Routledge, pp.119-153
- Warnock, G.J. [1967] *Contemporary Moral Philosophy*, Palgrave
- Williams, B. [1972] *Morality – A Introduction to Ethics*, Cambridge University Press
- Williams, B. [1986] *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge
- (『生き方について哲学は何が言えるか』 森際康友・下川潔訳 産業図書 1993)
- 佐藤岳詩 [2017] 「二つの倫理学 — 選ぶことと視えること」 *Humanitas* (8) pp. 93-105
- 杉本俊介 [2013] 「フィリッパ・フットの自然主義・徳理論・Why Be Moral? 問題」 『実践哲学研究』 第 36 号, pp. 181-208

¹ 強調は原著者による。

² 3 節で紹介するメアリー・ミッジリーはこの部分をフット自身の主張と理解して、自説を展開している。

³ (p. 140 / 187) は原著 p. 147、翻訳 187 頁を指す。以下、同様。なお、翻訳があるものは基本的にそれらに従ったが、訳語の統一などの点から筆者が改めた箇所もある。[]内は筆者が補った。

⁴ これらは後に「濃い概念」「薄い概念」として知られる区別である。cf. Williams [1986]

⁵ このことは「その善さを支持する (count in favour of) 何かについての事実が完全に変化しても、「善い」の意味は変わらない」(ibid. 111) ということの否定ということもできる。ヘアは、『道徳の言語』において、「善い」の意味と適用基準を区別したうえで、意味は勧めという指令的要素に存するがゆえに、内容にかかわる適用基準が事例ごとに変化しても、「善い」の意味は一定であると主張していた。cf. Hare [1952] chap. 6

⁶ この何かを見るときの特異な仕方、ポイントを理解可能にする特異な背景、というアイディアにはそれぞれフットの同僚であるアイリス・マードックおよびエリザベス・アンスコムらとの相互の強い影響関係が見て取れる。

⁷ ただし、フットは事実と価値の二分法を否定するため、こうした事実の記述は実践的推論の結論として行為を導き出しうるものと想定されている。

⁸ Cf. Williams [1986]

⁹ ニーチェとの間に道徳的議論が成立するかどうかは、フットも触れている (Foot [1954]、[2001])。

¹⁰ フットの思想全体の展開を丁寧に追いかけた論考として、杉本俊介 [2013] 「フィリップ・フットの自然主義・徳理論・Why Be Moral?問題」がある。

¹¹ ヘアは、たとえば、ウィリアムズが座長を務めた政府委員会の報告書を功利主義に基づく適切な仕事と賞賛する一方、メアリー・ワーノックが座長を務めた委員会の報告書を実質的な直観だけに基づくものとして強く批判している。cf. Hare [1986]

¹² Cf. Anscombe [1958]

¹³ 選択の倫理と見方の倫理の対比については、佐藤 [2017]も参照のこと。

¹⁴ 本稿は科学技術研究費、基盤研究 (C)「メタ倫理的観点から見た規範倫理学理論の再構築」による助成の成果である。